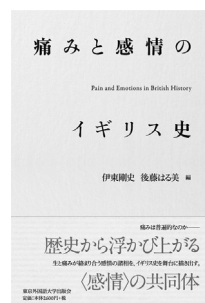


書 評

伊東剛史、後藤はる美編
『痛みと感情のイギリス史』
(東京外国語大学出版会、2017)



Rachel Ablow, *Victorian Pain*
(Princeton University Press, 2017)



浮岳 靖子

痛みは普遍的なものなのか。痛みの研究はどこまで可能か。この一見とりとめもない研究対象への挑戦と成果が『痛みと感情のイギリス史』において提示された。本書は6人の、専門を異にするイギリス史研究者が、17世紀から20世紀初頭までの様々な事例を「痛み」に焦点を当てて、生きた資料とともに鮮やかに論じていく力作である。

この研究プロジェクトは、2010年にICUでヨーク大学のマーク・ジェナー氏を迎えて開催されたワークショップ『恐怖のかたち——感情の文化史を考える』から派生したものという。感情史の発展の可能性を探るうえで、では、「痛み」を軸に据えその歴史的・文化的な意味合いや変遷を捉えようとすればどのようなテーマ設定が可能なのか、それぞれの研究者が試行錯誤や話し合いを重ねた取り組みが結実したものである。

本書はI「神経——医学レジームによる痛みの定義」(高林陽展)、II「救済——19世紀における物乞いの痛み」(金澤周作)、III「情念——プロテスタント殉教ナラティブと身体」(那須敬)、IV「試練——宗教改革期に

における霊的病と痛み」(後藤はる美)、V「感性——18世紀の虐待訴訟における挑発と激昂のはざま」(赤松淳子)、VI「観察——ダーウィンと象の涙」(伊東剛史)の6つの多角的なアプローチによる章と、それを繋ぎ纏めるための伊東氏と後藤氏の前章と後章から成り立っている。第I章からIII章までは現代に始まり時代を遡っていき、続く第IV章からVI章までは時間軸に沿って近世から現代へと再び戻ってくるよう、意図的に配置が施してある。

「痛み」の研究がイギリスで一つの興隆をみたのはここ数十年のことである。それは折しも麻酔(エーテル、クロロフォルム)の成功と発展から150年あまりを記念しての研究ラッシュであったが、それらはあくまでも科学史・医学史の枠内で語られる「緩和すべき」痛みの研究であった。痛みの軽減は医科学の進歩を示す指針であり、それはいわば高度な文明を示すものであるかのように扱われてきた。痛みの克服、痛みのコントロールは近代医学における責務であり、それにより人間の生活はより豊かになっていくものである、という言葉説のもとに成り立つ議論がそこにはあった。

痛みとそれを解明しようとする近代医科学の関係はもはや切っても切れない関係にあると言えるだろう。それゆえ、この『痛みと感情のイギリス史』は近現代医学における痛みの問題を起点とする。ただし、近代医学を「肯定的に評価するため」ではなく、「今日の医学的な解釈に基づく痛みの理解を、過去に表現された言葉や視覚的表象から相対化する痛みの文化史を目指す」と第I章「神経」の著書、高林氏は書く。今日私たちが持つ「痛み」がどのように解明されようとし、それが長い間においていかに複層的な意味合いを持ってきたのか、それを提示しようとする試みである。高林氏によると、19世紀末以降のイギリスでは痛みは何かという哲学的な問いが頻繁にされるようになってきたが、進化論の興隆により、痛みは個人が関わる苦しみだけでなく、「人類もしくは社会全体の問題」として扱われるようになったという。痛みは主観的な問題から客観的な問題へと、また、個人から全体へと、議論の広がりを持つ問題へと変貌していったのだ。

本書の議論は、第II章「救済」において時代を遡り、19世紀の社会における弱者救済の場における痛みの問題に着目する。金澤氏は、この弱者救済において「受け手」と「与え手」の間の感情には交渉を成り立たせる「一

種の通貨としての痛み」があったとし、その「痛み」を媒介とする交渉がされていったという。弱者の痛みが「見える」ように「展示され」また、「描写され」ていく事例を見ていく過程で、物乞い・浮浪者が発する痛みが救済の受け手・与え手の間に感情レベルの「回路」を形成し、「共同体」の形成・維持に貢献したと読み解く。

そして第III部「情念」において、議論はさらに時間を遡り、17世紀の身体論へと進んでいく。リン・ハントが他者の苦痛に思いを馳せ、社会的境界を越えた「共感 (empathy)」や「同情 (sympathy)」は「個人の自律性や身体の個性性に対する意識が高まる18世紀半ばに発見された新しい感性」と論じたことを挙げ、では17世紀の身体観・人間観の中で痛みがどのようにとらえられていたのかについて考察するものである。17世紀に行われていた公開処刑を見たものが書き残した覚書に注目する。「目で見た後で感じた痛みとパッション」と題された覚書を解題するうえで、那須氏は *passion* という言葉が大別して「苦難」と「感情 (情念)」の二つの意味に分かれていく変遷の過程を概観し、さらにプロテスタンティズムにおける信仰と情念へと議論を発展させていく。

次の第IV章は同じく17世紀を専門とする後藤氏による分析であるが、17世紀のキリスト教的な意味合いから当時の人々が痛みをどのように経験、理解、表現したのかを女性の日記や魔女事件といった資料から再構築し分析する作業である。後藤氏によれば近世における痛みは、キリスト教世界においては報い (penalty) や懲罰 (punishment)、また原罪を想起する言葉であったが、17世紀において痛みという言葉がそれほど見受けられないのは「近世における痛みをめぐる語りが精神的あるいは肉体的苦痛それ自体ではなく、その外側 (17世紀においては宗教的文脈) に意味を見出すところにあった」からだという。歯痛について書き残した女性によれば彼女は痛みを「試練」と認識しており、それは「神が改心を促すための試練として病を与える」という理解に基づいているものであったのだ。また、17世紀においては魔女による呪いは、「自然ではない」要因によって引き起こされるとして、病気的一种と認識されていたという。痛みは神の意志、神の介入が身体と魂の状態にある種のシグナルとして受け入れられたのだという。

続く第V章は、18世紀における夫婦間の婚姻訴訟に見る残忍性と苦痛の訴えとそれに対する周囲の人々の対応から「痛み」のもつ意味と解釈を分析するものである。裁判においては原告である妻たちの訴えと被告である夫からの主張に対し、周囲の人々が妻の受けた虐待行為の訴えをどのように共有、解釈したかが記録されている。その解釈はしばしば「コンテキスト」によって左右されるものであり、「パフォーマンス」ととらえられる行為によっても解釈は異なった。原告の身体的・精神的苦痛は訴訟という場においては「より一般性のある社会秩序に沿って言語化される必要があった」という特徴があり、複数のものの感性が重層的・多元的に共存する場として読み解くことができる。

続く第VI章「観察」では、議論は再び19世紀の舞台へと戻ってくる。19世紀は「現象としての痛み」と「感情としての痛み」という異なる痛みの解釈が顕出してくる時代であったが、その中でダーウィンの感情研究と、1870-80年代に最も盛り上がりを見せた動物生体解剖に反対する論争を基軸に、「動物の苦痛」がどのように社会において受け止められたのかを分析する章となっている。ダーウィンがしばしば経験し、語った「眠れぬ夜の苦しみ」はダーウィンが「奴隷や動物という他者が被った暴力を想像し、受け止めた苦しみ」であるそうだが、それを自ら表現することは奴隷や動物といった他者の苦痛を自らの身体をもって「領有」し、他者の感情に訴えかける行為であるとの分析は興味深い。動物生体解剖論争が激化したのは、生理学研究の発展、麻酔薬の普及(使用の可能性)、それに進化論の影響などを受けて、人間が動物をどのように認識するか(すべきか)への興味が深まったことに起因するだろう。

個別の研究章が終わったところで、伊藤氏と後藤氏による「痛みと感情の歴史学」と題された小論が今後の可能性を示唆する形で全体をまとめあげる。「感情史の理論と方法」という項目では感情史という、まだ比較的年月の浅い研究分野の歴史と方法、問題点と可能性が整理されており、これからこの分野に足を踏み入れたいと思う研究者にとっては貴重な資料となるだろう。

21世紀に入ってから十数年間は「感情史」の発展の時期であったが、「痛み」に軸足を据えた研究ではなく、「感情史」の可能性を探る超領域的な視

点を目指すところに始まったからこそ、この研究は一つの成功を見たといえるだろう。前述のように既存の医科学史の背景を基調とする「痛み」の研究は、とにかく「身体的な痛み」に偏りがちであり、その意味での痛みの分析は主観的な枠組みから抜け出すことはできない。しかし、本書では痛み＝「間主観的な経験」とあるというところに起点を設定したことにより、より複層的で深みのある分析になった。

専門とする時代もテーマも異にする複数の研究者の論点を1つの方向性をもって纏め上げていく作業は並大抵ではない苦勞を伴うと推測される。時に時代を遡行し、自由にテーマ間を縦断していくように見えるこの手法は、専門外の読者にとっては少々混乱するところもあるが、それぞれの研究者が昨今の心性史、感情史の時流に乗り、自ら感じとった疑問点を真摯に問題提起へと形作り論じていく姿は多くの読者に感銘を与えるだろう。

携わった研究者全員がイギリス史を専門とすることから『痛みと感情のイギリス史』とタイトルがつけられているが、イギリスらしさとは何なのか、他国との相違はどのようなものかと言えるのか、もっと知りたいところではあったが、各人が単なる概念としての議論だけではなく、明確な資料を提示し読み解いているため、さらなる細分化、応用は今後の研究の発展に委ねられるところであろう。大きな枠組みと問題提示で議論の土台を築いた功績により、今後のこの分野での研究の可能性は大きく広がったと言える。

補足的になるが、歴史学以外においても社会的・文化的な意味合いでの痛みの研究は進んでいる。Rachel Ablow, *Victorian Pain* は、このような新しい潮流に乗った研究書の最先端にいてもよい。もともとは英文学を専門とする Ablow (University at Buffalo 教授) は、今までにも結婚というプロットにおける sympathy など研究対象とし、ヴィクトリア朝の sensation、feeling などにも造詣が深い。彼女が本書で提起するのは「近現代における痛みとは社会と複層的に重なりながら特徴づけられるものである」(p. 23) ということである。英文学者として Charlotte Brontë、Thomas Hardy の文学作品を分析するが、その他 John Stuart Mill、Harriet Martineau、Charles Darwin という面々の記述も分析する。Ablow によれば痛みの解釈は、他者との、または他者の中における関係性において分析

可能になるものであるという。これは、『痛みと感情のイギリス史』が依拠する方法と類似している。研究分野の異なる研究者が、新しい分野での同じ理論を採用してその分野を充実させていくという時代に突入している。これからもこのように超領域的な学術研究の発展が進み、それにより人々の思考に新たな視座を提示していくことを期待する。

——岐阜聖徳学園大学 非常勤講師